

保育園の砂——ある日の去り際に——

西 隆太郎

(大学教員)

毎週、私はA保育園を訪れ、子どもたちと

遊ぶ時間を頂いている。A保育園の先生方に、
そして子どもたちに、いつも温かく迎えてい
ただいてきた。

朝、自由遊びの時間を共に過ごした後、私
は子どもたちと別れて帰ることになる。いつ
までも手を振ってくれる子、「明日も来る？」
と尋ねてくれる子……。

子どもたちの世界では、どの去り際も、心
あるかかわりの中で生まれている。

クリスマスの日の朝、園庭で子どもたちと

遊んだ。

「サッカーしよう！」と私を誘う、三歳のK
君。そのうちに、S君やT君も加わって、途
中からはバスケットのゴールに、どこまでも
一緒にチャレンジした。

それがいつの間にか、かくれんぼになり……
トンネルの中に三人で隠れ、鬼のT君が見つ
けてくれるのを待つ時間。私たちは、いつも
と違う静かさの中で楽しみを共有した。T君
と再会したみんなが歓声を上げると、そこに
年長の女の子も加わって、トンネルはお化け
屋敷になっていった。女の子に配ってもらっ

西 隆太郎 (にしりゅうたろう)

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科准教授。

専門：保育学、臨床心理学。



▲かくれんぼのトンネルは、みんなが集まってくるうち、やがてお化け屋敷になっていった

た、見えない入場券を手に、次々にお化け屋敷を探検する。同じ一つの物も、子どもたちの心と楽しさに導かれ、どこまでも変化していく。

ちようどその近くで、仲間とはぐれてしま

つた女の子が泣いている。私の手を次々に引っ張る男の子たちに「ごめんね、ちよつと待っててね」などと言いながら、何とか彼女をなだめようとしてみたり……。

いろんなことがあった。

子どもと遊ぶ時間について、津守眞はこう語っている。

「いっしょにたのしくいることが、そこですべてである。その時間は、ずい分長い。(略)けれども、いっしょにたのしくいる時間はみじかく感ぜられる。(略)こういうときの子どもの世界には、前も後もないみたいだ。その瞬間のたのしきがあるだけのようである。(略)私は、おにごっこをしていたのではなかったのだと思う。子どもといっしょに、とにいる世界をたのしんでいたのだと思う。」

(津守眞著『子ども学のはじまり』)。

他にどう表現することもできない。子どもと共にいる時間とその尊さを、これほど心動かす言葉で語れる人を、私は他に知らない。

お昼も近づき、そろそろ私も帰る頃合いとなった。

「そろそろ帰るね。ばいばい、また遊ぼうね」
T君は、持っていたお皿から砂をすくって、私の手のひらに乗せてくれた。

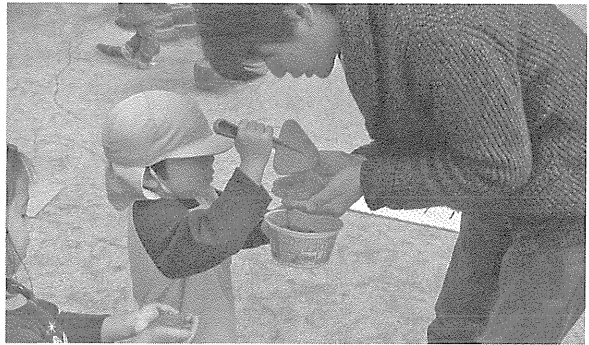
「おいしいね！ T君、ありがとう」

そうして帰るつもりだったが、何度もおかわりの砂をくれる。

「持って帰っていいよ。こぼさないでね」

「ほんと?! ありがとう。大事に持って帰るよ」

私はT君が振る舞ってくれた砂を紙に包んだ。保育園の砂だが、名残惜しく持って帰る今、どこかしら甲子園の砂のようにも思えてきた。



▲カップに砂や草を入れ、ごちそうを作ったT君。
「持って帰って」と私の手に乗せてくれた

「その中に入れたの?」

「そうだよ。ありがとう」

そして、ずっと手を振り続けながら別れた。

別れの時、私にも子どもたちの中にも、いろいろな気持ちがあ動く。去り難しい気持ちもある。

り、どんな言葉を掛けて別れようか……と、さまざまに考えもする。

けれども去り際は、私と子どもたちの間で生まれるものである。私の意図だけで、子どもたちの体験をコントロールすることなど、できるはずもない。心ある去り際の体験は、むしろ子どもたちのほうから与えてくれることが多い。この日も、私が配慮してというより、T君のほうから砂のプレゼントを、そして心に残る去り際をくれたように思う。

誰にも体験があると思うが、目覚めて心に残る夢がある。とても長い夢で、どんなストーリーだったか、すべてをすぐに思い出すことはできないが、最後のシーンだけは、胸の奥の体感と共に、ずっと後を引いている。それが、その夢を象徴する「意味の感覚 (felt sense)」だったのだろう (E. T. ジェンド

リン著『夢とフォーカシング』)。

園庭で過ごした時間。その中には、何気ないけれども、しかし大切なことが、たくさんあった。どんなことも、思い出してみれば、その時の楽しさや、子どもたちにどう出会おうかといういろいろに考えたこと、心動かされたことがよみがえってくる。

最後にT君がくれた砂。それは名残惜しい夢の世界に別れて目覚めた時の体感のように、心に残っている。その日、園庭で出会った大切な体験の一つ一つが、集約されているように思える。

今そこに残されているのは少しばかりの砂であって、外から見ればただの砂にしか見えない。それでも、そこには子どもと私との夢が生きている。